

論文名：Evaluation of oral health related QOL in patients with temporomandibular Disorders (顎関節症患者における口腔関連 QOL の評価)

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 小野田 紀生

【緒言】

顎関節症は顎運動に伴う咀嚼筋の疼痛、開口障害、関節雑音などを特徴とする疾患であり、病因は多因子性で心理社会的要因も関連していると言われている。近年、医療評価研究として quality of life (QOL) の評価が重要視されているが、本邦では顎関節症患者の QOL に関する報告は少ない。そこで、顎関節症患者の口腔関連 QOL を主観的に評価することで、患者が抱えている問題、悩みを把握し、患者が満足できる治療体系を確立することを目的とし、顎関節症患者の治療前後の口腔関連 QOL を調査し、統計的解析を行った。

【対象と方法】

2017 年 7 月から 2019 年 8 月までに、七樹歯科医院で顎関節症と診断された患者 56 名 (男性 13 名、女性 43 名平均年齢 44.5 ± 18.8 歳) を対象とし、顎関節症を認めない一般人 30 名 (男性 11 名、女性 19 名平均年齢 42.9 ± 12.5 歳) をコントロール群とした。顎関節症の診断は Diagnostic Criteria for Temporomandibular Disorders (DC/TMD) の分類に従い、口腔関連 QOL の評価は、Japanese version Oral Health Impact Profile (OHIP-J54) を用いた。総スコアと領域別スコアを対象とコントロールの 2 群間で比較検討するとともに、対象群は各診断別にスコアの相違を比較検討し、QOL 低下に影響を及ぼすと考えられる 8 つの臨床的因子 (性別、年齢、最大開口量、click、closed lock、クレピタス、ブラキシズム、痛みの NRS) を抽出し、性別、年齢、最大開口量、痛みの NRS では中央値、click、closed lock、クレピタス、ブラキシズムはその有無で対象を 2 群に分けて Mann-Whitney U 検定にて比較検討した。さらに、治療 4 か月後に再評価し得た 27 名に対し、治療前後の各スコアの変化を Wilcoxon 符号順位検定にて比較検討した。

【結果と考察】

対象群はコントロール群と比較して総合スコアが有意に高く、すべての領域において有意差を認めた。また、各診断別の比較ではスコアに有意差は認められなかった。臨床的因子で 2 群に分けて比較検討した結果、痛みの NRS と性別でスコアに有意差を認めた。また、治療前後の OHIP-J54 の比較では、「社会的困りごと」以外のすべての領域で統計学的な有意差を認め、さらに治療後とコントロール群を比較したところ、「身体の痛み」と「追加項目」のみで統計学的な有意差が認められた。顎関節症など慢性疼痛をともなう疾患は、心理的ストレスなどから QOL をより低下させることが報告されているため、速やかに疼痛を改善させることが最優先の治療と思われた。

また、本研究では 8 つの臨床的因子を解析したが、有意差をもって QOL 低下に影響を及ぼしていた因子は痛みの NRS と性別 (女性 > 男性) であった。疫学的に顎関節症の罹患率は女性が男性の 2 倍以上であり、さらに女性患者は男性患者と比較して顎関節症や慢性疼痛の影響を受けやすく、QOL がより低下しやすいとの報告がある。また、45 歳以上の女性はおうつ病などの影響を受けやすく QOL 低下のリスクが高いことも報告されており、女性の顎関節症患者に対する治療にはその特殊性を配慮する必要性が示された。

顎関節症は、身体的な要因と精神心理的な要因から発症する疾患であるため、心身両面からの治療が必要となる。精神心理的要因が強い症例は、精神科などへの対応が必要な場合もあり、OHIP-J54 は顎関節症のスクリーニング検査として有用であると考えられた。